



教育:名古屋大学医学部学生研究会 (LOVE LAB)

研究医への志を 育み、伸ばす

名古屋大学医学部は、基礎医学研究に携わる研究医、研究マインドを持った人材の養成に力を入れてきました。2011年度には「名古屋大学医学部学生研究会 (LOVE LAB)」を立ち上げ学部生の早期からの研究活動に対して、学部全体で指導・支援を実施。大学間交流の機会や海外派遣についての費用のサポートなども整えています。LOVE LABの魅力や今後の展望などについて、担当教員と参加学生の皆さんに語り合っていました。





学生の興味と 研究室を結ぶ 独自の支援活動を展開

学生研究会の概要と参加の理由を 教えてください。

黒田 「名古屋大学医学部学生研究会(LOVE LAB)」は、研究を行う学生や研究に対して関心を持つ学生を増やそうと、2011年度に発足した研究サポートプロジェクトです。医学部医学科では3年次後期に「基礎医学セミナー」を開講し、3年生全員が半年間にわたって基礎系の研究室で実験研究を行います。本学科の特長となっているこの取り組みにより、基礎医学研究に対する学生の興味や進路を広げましたが、LOVE LABで

は学生の研究活動を1年生から6年生まで全学年にわたってサポートしています。そして、研究に興味がある学生に、気軽に研究室を訪問して研究内容を知る機会や、基礎医学セミナー修了後も研究を続けられる環境を用意するため、2つのコースを設けてさまざまな支援を提供しています。

まず、研究室所属前のベーシックコースでは、研究室を訪問するラボツアーや教員が自身の研究内容を紹介するメディカルサイエンスカフェなどを開催。学部生でも研究室に所属し研究がしたいという希望があれば、いつでも研究室配属をサポートしています。そして、研究室所属後のアドバンスコースでは、研究活動の進捗報告会や他大学と一緒に全国合同リトリートなどを開催しています。

A 黒田 啓介 KURODA, Keisuke 特任助教

名古屋大学大学院医学系研究科博士課程単位取得満期退学。医学博士。現在、名古屋大学大学院医学系研究科特任助教。専門分野は神経情報薬理学。

B 前田 勇貴 MAEDA, Yuki 名古屋大学医学部医学科6年

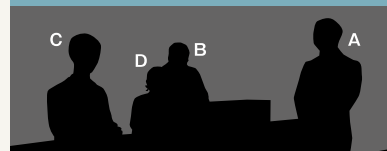
LOVE LABでは、生体反応病理学の研究室で研究を行う。

C 長谷川 智哉 HASEGAWA, Tomoya 名古屋大学医学部医学科5年

LOVE LABでは、神経遺伝情報学の研究室で研究を行う。

D 大迫 史佳 OSAKO, Fumika 名古屋大学医学部医学科4年

LOVE LABでは、機能組織学の研究室で研究を行う。





大迫 私はもともと研究に興味があり、早期に研究体験ができる基礎医学セミナーにひかれて名古屋大学に入学しました。ただ入学してみると、何が研究できるのか、どうやって研究室と連絡をとったらいいのかがわかりません。そこで、LOVE LABのラポツアーで1年次から実際に研究室の中の様子を見学したり、メディカルサイエンスカフェで先生方のお話を伺ったりして、自分の研究テーマを見つけることができました。1年次の夏に研究室配属のサポートもしていただき、現在に至ります。

長谷川 僕は研究医志望だったため推薦入試で入学し、推薦入学者は参加が必須となるベーシックコースから始めたのですが、1年次にLOVE LABのサポートで、2週間、神経遺伝情報学の研究室に所属することができ、このまま残って研究をしようとアドバンスコースに進みました。

前田 同じく推薦入試組なのでベーシックコースから参加しました。ただ、研究室に所属する前に、まずは生物学などの基礎的な知識を固めることが必要だと考え、研究室の選択は基礎医学が終了する3年次に行いました。そのため現在所属している生体反応病理学の研究室で本格的に研究を始めたのは、3年次の5月からです。

黒田 3人ともLOVE LABを利用して研究室に所属していますが、その時期や理由もさまざまです。いろいろなパターンがあるので、学生には多様なチャンスを提供し、自分に合った選択をしてもらいたいと思っています。そもそも1

年次の段階ではやりたい研究がはっきりせず、やりたい研究が決まっていたとしても、研究室の研究内容とどう関係しているのかもわからないことが多いでしょう。その点を理解して、研究意欲の低下につながるミスマッチを防ぐこともLOVE LABの役割だと感じています。

関心のあるテーマを見つけ 1年次から研究に打ち込める

■ 現在、どんな研究を行っていますか。

長谷川 研究室では分子状水素の研究をしています。分子状水素がパーキンソン病や脳卒中など酸化ストレスに関係する疾患の治療に役立つかどうか、そのメカニズムを研究しています。学生の問しかできない思い切ったテーマの研究ですが、学会やリトリートでの発表に支援いただいています。LOVE LABで発表や議論の練習を積んできたおかげで、3年次の基礎医学セミナーの発表では最優秀賞を獲得することができました。

大迫 私は機能組織学の研究室に所属し、最近では末梢神経のマクロファージという細胞を研究しています。免疫の細胞としてよく知られていますが、神経の発達に関与し、脱髄疾患や炎症疾患に関わっているのではないかと疑い、神経の発達の段階を研究しています。

前田 研究テーマは、アスベスト発がんです。アスベストが悪性中皮腫をつくり出すことはよく知られていますが、その発がんメカニズムはいまだにわかっていません。鉄の生体への影響という側面からアスベスト発がんとの関与を追っており、悪性中皮腫の新たな治療法の確立を目指して研究を行っています。

黒田 本学科の入学者は毎年100～110人ですが、うち6～7割が大学院に進学します。つまり、多くの学生が将来どこかで研究をするつもりであるということです。ただ、今みなさんが紹介してくれたように、大学の研究は非

常にレベルが高いものになります。そこで、LOVE LABを活用して研究への理解を深め、基礎医学セミナーで取り組む研究テーマを見つけたり、セミナー修了後も研究を継続できるよう支援を受けたりすることで、大学院に進学したときにスムーズに研究活動が進められるのではないかと考えています。

交流が意欲を高め 新しい世界を見せてくれる

■ LOVE LABの特長や魅力について教えてください。

前田 研究を行っている学生は、医学部全体で見ると少ないので孤独感を抱くことがあります。ただ、LOVE LABでは東京大学、京都大学、大阪大学などを行う全国合同リトリートや進捗報告会等が開催され、他大学も含め、他の学生の話聞くことができるので、「研究をしている医学生は自分だけではなかった、僕も頑張ろう」と思えるのが大きいですね。学生同士の交流を通じて、自分の研究のアプローチ方法が増える点も魅力です。1年生にとっては、進捗報告会が生の研究に触れられる良い機会にもなっています。

長谷川 進捗報告会は少人数で、参加者はほぼ学生なので、どんな質問をしても構いません。





異分野について知ることができるだけでなく、主体的な議論の訓練ができ、研究発表の基礎力が養えると感じています。正規の授業カリキュラムと研究との両立についても、既に両立している先輩の知恵が聞けるのはとても参考になります。そして何といても、研究活動の一環として学会に参加するための資金援助があることもLOVE LABの大きなメリットです。

前田 そうですね。昨年は長谷川君と一緒に韓国・高麗大学が主催する、アジア圏の医学部生を集めたりサーチミーティングに参加し、英語で研究発表を行いました。また、先日は、医学会総会のシンポジウムに参加し、まだ学生ながらシンポジストとして発表する機会をいただきました。LOVE LABを通じて大きなチャンスが得られ、自分でも想像もつかないような経験が積むことができたことに感謝しています。

大迫 学会やリトリートに参加すると、やはりモチベーションが上がりますね。「研究に取り組む学生がこんなにいる」と実感できますし、他学年や他大学の学生と率直に議論を交わすことで、とても刺激を受けています。また、本学で行われるリトリートでは、ドリンク片手にいろいろな話を聞くことができ、自由な雰囲気も魅力だと思います。

黒田 本学のLOVE LABの特長は、クラブ活動のように自由度が高く、自分のスタイルで研究に取り組める点にあります。そうした雰

囲気がリトリートでも感じられるのでしょうか。もちろん、研究を発表できるレベルまでまとめるのは大変なことです。LOVE LABからの支援が、多くの学生が学会やリトリートへ挑戦するきっかけになっているようです。

長谷川 もう一つ、黒田先生のように教員の立場から各研究室と折衝くださる担当教員の存在も、心強いと思います。学生の立場で教授の研究室をいきなり訪問するのは難しく、先生から研究室の情報を教えていただけるので非常に助かっています。

100年後の世界で待つ 患者さんを救うために

■今後の展望をお聞かせください

黒田 30年以上続けてきた基礎医学セミナーを核に、推薦入試で研究志望の学生を集め、LOVE LABがその研究活動を応援する。こうした本学独自の取り組みによって、最近の研究医を志望して本学に入学してくる学生が確実に増えてきました。大学自体に研究に取り組む学生を応援する雰囲気醸成されつつあり、さらに大きく発展させていきたいと思っています。今後はアプローチを高校生に広げつつ、学生を受け入れる研究室の意識を変えることも大切だと考えています。

長谷川 LOVE LABを活用する学生をもっと増やすには、入学前から情報を提供することが大事だと思います。一方で、今後、自分自身がどうすれば研究を続けていけるかということにも関心があります。研究を続ける人材が増えるほど、今後のキャリアパスを学生も含めて大学全体で考えていかなければいけないのではないのでしょうか。

大迫 そうですね。さまざま意見を伺って感じたのは、これまでは大学側からのアプローチがほとんどだということです。今後は学生側から、こうしたら研究を続けやすいという意見

を出していけたら、と思います。私たち自身が、研究医が減少した現状を変えていく開拓者にならなければいけません。

前田 僕はLOVE LABの支援によって学会に参加でき、先生方の指導によって研究を続けてこられたので、それを後輩に伝えていくのが使命だと感じています。また、LOVE LABの楽しさと、研究しやすい本学の環境を対外的にアピールし、研究医の道も選択肢の一つであると伝えていきたいですね。

やはり、目の前の患者さんを助ける医師の仕事は、やりがいがあって目指しやすい。一方で、医学の基礎研究の成果が患者さんの元へ届くには50年、100年はかかります。ただ、医師免許を持った研究者の存在意義は大きく、将来の医学の礎になる基礎研究の大切さを学生時代に理解できれば研究医も増えていくと思います。

黒田 もともと名古屋大学のあるべき姿は、研究マインドを持った人材を育てることにあります。確かに基礎研究は社会の何に役立つのかわかりにくいものですが、今の研究が100年後の何万人、何百万人、何億人を救える仕事になるかもしれない。学生研究会は、研究医がそんな魅力的な仕事だということを、今後も医学生のみなさんに熱く伝えていきたいと思っています。





研究: 名大医薬系3部局交流シンポジウム

次代を創る共同研究

大学院医学系研究科 腫瘍病理学 榎本 篤 准教授



医学系研究科・創薬科学研究科・ 環境医学研究所の 交流シンポジウムを開始

近年、医学系の研究科にはこれまでの医学教育、基礎医学研究、臨床医学研究に加えて創薬研究への貢献が求められています。加えて、昨今は産学連携の重要性の認識が高まり、さまざまな競争的研究資金を配分する機関が応用を視野にいたした研究を重点的に支援しています。本来、創薬に結びつく研究成果をあげることは多くの医学研究者にとって純粋なモチベーションの一つではありません。製薬会社やスタートアップ企業とは異なる、大学でしかできない創薬研究を模索する必要があります。

このような背景の中、本学では医学系研究科・創薬科学研究科・環境医学研究所による「名大医薬系3部局交流シンポジウム」を2016年から年1回開催しています。本交流シンポ

ジウムの特徴の一つは、毎回、若手研究者数名が主催者となり、体裁や形式にとらわれないことなく、研究力向上のために実施していることにあります。第1回目から順に創薬科学研究科、環境医学研究所、医学系研究科の若手研究者が主催し、今後も同様の順番で開催することが決まっています。その内容は、各部局の若手および中堅の研究者数名による研究発表、ポスター発表と討論、外部の研究者による特別講演から構成され、毎年100～150名が参加しています。また、シンポジウム



後には情報交換会も開催されます。

臨床上の重要な研究課題および臨床データ・検体を有する医学系研究科、生体内のさまざまな組織・臓器の恒常性や機能を独自の視点で研究する環境医学研究所、そして構造生物学・創薬化学等の専門性の高い研究を展開する創薬科学研究科の研究者が会し、それぞれの研究を知ることによって新たな共同研究を生み出すことが本交流シンポジウムの目的です。第1回目は薬剤トランスポーターの研究者、昨年度はAI創薬の研究者による特





別講演もあり、多くの参加者から大きな反響がありました。留学から帰国した直後の若手研究者が、当時話題であった研究の最新内容を発表したときは、「まさかあの話がここで聞けるとは!」と大いに盛り上がりを見せました。私自身は、新聞やニュースでも話題になっていた創業科学研究科の研究について、ポスターセッションで研究の詳細や苦勞話を聞くことできたことが非常に印象深く記憶に残っています。

交流の深化が 新たな共同研究のきっかけに

本交流シンポジウムを機に、東山キャンパスと鶴舞キャンパスの部局間での共同研究が広がっています。私自身は本交流シンポジウムがきっかけとなり、環境医学研究所の研究者の方々と脂肪の線維化や炎症に関する共同研究を現在進めています。こうした経験から共同研究について考えると、まずは他の研究者の研究内容を知る・聞くこと、あるいは自身が学会などで自身の研究内容を話すこと、から自然と始まると感じています。ときに義務感のようなもので連携が始まる場合もありますが、それは決して楽しい共同研究には結びつきません。そのような意味で、東山キャンパスと鶴舞キャンパスはさらに心理的に近くなる必要があり、お互いの研究内容をより深く知る機会を増やしていくべきだと考えています。本交流シンポジウムは、部局間のさ

らに深化した連携を目指して、今後は、泊りがけで研究発表・研究者間の交流を行うリトリートの開催なども目指していきたいと考えています。

名古屋大学を越えた共同研究、 次のブレークスルーの足場へ

本交流シンポジウムには学内の3部局の関係者にとどまらず、他大学の研究者も頻りに参加しています。これまで岐阜薬科大学、群馬大学 生体調節研究所、岐阜大学 生命の鎖統合研究センター(G-CHAIN)の研究者の方に参加いただき、第3回目からは名古屋大学の中に拠点を置くラクオリア創業株式会社(以下ラクオリア)の方にも参加いただきました。その際は、本研究科の基礎研究に端を発し、現在ではラクオリア創業で進められている共同研究事業について、本研究科側とラクオリア側の両者から発表が行われ、まさに進行形の産学連携研究というものを目の当たりにすることができました。

その他にも、岐阜薬科大学と本研究科においては、鉄蛍光プローブに関する共同研究も進行中と聞いています。また、私が研究

指導に関わっている本研究科の大学院生は創業スタートアップ企業の設立を目指していますが、ラクオリアの方から貴重な助言を何度もいただいています。このように本交流シンポジウムをきっかけに、当初目的としていた部局間の共同研究のみならず、大学の枠を越えた共同研究が各所で始まりつつあります。

また、来年度には東海国立大学機構が設置されることになり、名古屋大学と岐阜大学がその傘下に入る予定であることは周知の通りです。本機構の設立を新たな産学連携研究の推進や国際的ブランド力の向上につなげるためには、表層的な統合にとどまらずに、統合したからこそ可能な研究の実績を積んでいく必要があると考えています。本研究科は糖鎖研究において長い歴史と国内有数の実績を有していますが、同様に糖鎖研究で卓越した研究成果を上げている岐阜大学 G-CHAINとの連携が、本交流シンポジウムで一層強化されていくことを望んでいます。その結果、本学から創業などの分野において大きなブレークスルーが生まれ、本学の3部局ならではの特徴ある研究内容、研究拠点が確立されていくことを期待します。

第3回 名大医薬系3部局(創業/環医/医)交流シンポジウム
 ~岐阜薬科大学・岐阜大学 G-CHAIN・ラクオリア創業合同シンポジウム~

2018年11月30日(金)
 10:00-17:30(9:30-受付/18:00-情報交流会)
 鶴舞キャンパス(医系研究棟1号館地下会客室)
 参加登録受付中・当日参加可能

特別講演(16:20)
 東京医科歯科大学 田中博先生
 「AI 創業の研究の現状と展望」

Speakers
 10:05 医学系研究科 竹森幹人「Gタンパク質と糖尿病疾患」
 10:35 環境医学研究所 中尾由華「ケム不安定性を示す遺伝性疾患の分子病態」
 11:05 創業科学研究科 山口崇英「抗菌活性を持つ核酸系天然物をリードとした創薬研究」

13:15 ラクオリア創業産学協同研究センター 川村清「名古屋大学のシーズから新薬創出へ、新規心不全治療薬の創薬研究」
 13:45 岐阜薬科大学 井上直樹「感染動物モデルを用いた先天性サイトメガロウイルス感染における防御免疫、免疫回復、免疫記憶の解析」
 14:15 岐阜大学 木塚康彦「N型細胞の枝分かれ構造の生成と疾患との関連性」

ポスター発表 11:35-13:15 / 14:45-16:15

連絡先：医学部 榎本 篤・創業 兒玉 智也・環医 廣口 博之

協賛：医学部 榎本 篤・創業 兒玉 智也・環医 廣口 博之

協賛：RIEM (Ritsumeikan Institute of Entrepreneurship and Management) 岐阜大学 G-CHAIN RaQualia



Global

国際:GAME (Global Alliance of Medical Excellence)

世界トップレベルの国際共同プログラム

大学院医学系研究科 国際医学教育学 粕谷 英樹 教授

前例のない国際的な
大学間ネットワーク

GAMEは香港中文大学の医学部長であるフランシス チャン教授が、世界のトップランキングの医学部・医学系研究科に呼びかけ、2017年に結成された国際的な共同プログラムです。現在、名古屋大学と香港中文大学(香港)、高麗大学校(韓国)、モナッシュ大学(オーストラリア)、ミュンヘン大学(ドイツ)、エラスムス・ロッテルダム大学(オランダ)、ポローニャ大学(イタリア)、ノッティンガム大学(イギリス)、アルバータ大学(カナダ)の9校により形成されています。

これらの大学は、英国のタイムズ誌によるTHE世界大学ランキング2019において香港中文大学53位、高麗大学校198位、モナッシュ大学84位、ミュンヘン大学32位、エラスムス・ロッテルダム大学70位、ポローニャ大学180位、ノッティンガム大学149位、アルバータ大学132位、名古屋大学301-350位に入っています。大学間のコンソーシアムは多く目にはありますが、このようなトップレベルの医学部・医学系研究科だけが集まった国際的な共同プログラムは他に例を見ないものです。

GAMEの目的は、革新的な医学教育の推進と世界に影響を与える研究への挑戦です。各分野の優れた研究をつなぐ国際ネットワークを強化し、メンバー校の戦略的、分野横断的、長期的な共同教育・共同研究を促進していきます。現在、年に1度のアニュアルミーティングで代表者たちが集まり、プログラムの発展に向けて具体的に検討し、新たな取り組みを着実に進めています。

学生が各国で学ぶサマーキャンプ

GAMEではメンバー校間での学部生・大学院生の交流を促進しようと、各大学間共通で運用できる学生交流のための基本合意書を策定し、短期・中期の臨床実習や研究室訪問の可能性を検討しています。

さらに、2019年7月29日から8月2日の5日間にわたって、第1回目となる「GAMEサマーキャ

ンプ」が本学で開講されます。キャンプには、各国の研究者や学生と体験を共有したい、国際的な視点を獲得しネットワークを広げたい、異文化への理解を深めたいといった目的をもつメンバー校の医学生が参加します。今回のキャンプのテーマは「災害医療」。日本は災害の多い国として世界から認識されており、本テーマが日本での開催に最もふさわしいと決定されました。日本は、頻発する地震、活火山の噴火、台風による被害、そして津波による原発事故など、さまざまな問題を抱えています。本学は、こうした災害被害を減らすための先端的な研究施設「減災館」を東山キャンパスに開設。最先端の減災研究を展開し、地域における減災実現モデルづくりを目指しています。今回のキャンプではメンバー校の学部生が「減災館」のほか、津波で大きな被害を受けた福島県の帰宅困難区域も訪問します。災害に遭った医

Create

To create a greater impact on health science & medical education and achieve sustainable outcomes

Enhance

To enhance global networks of research excellence in complementary fields and disciplines

Facilitate

To facilitate member institutions to achieve strategic, cross-disciplinary, long-lasting and impactful collaborations in research and education

療機関などを訪れ、震災当時の緊迫した状況下での医療従事者としての決断、医療のプロとしてのあり方などについて話をうかがい、実際の災害医療に求められるトリアージ分類とリーダーとその他のメンバーの役割分担、圧迫損傷時の注意点などについても学びます。

国際共同教育と 国際共同研究の先端へ

革新的な医学教育の推進にあたっては、本学と香港中文大学は大学院生の共同教育プログラムの締結に向けて準備を進めています。これが締結されるとアデレード大学、 Lund 大学、フライブルク大学とのジョイントディグリープログラム*、ノースカロライナ大学チャペルヒル校との共同指導プログラムに次ぐ、5つ目の国際共同教育プログラムの締結となります。

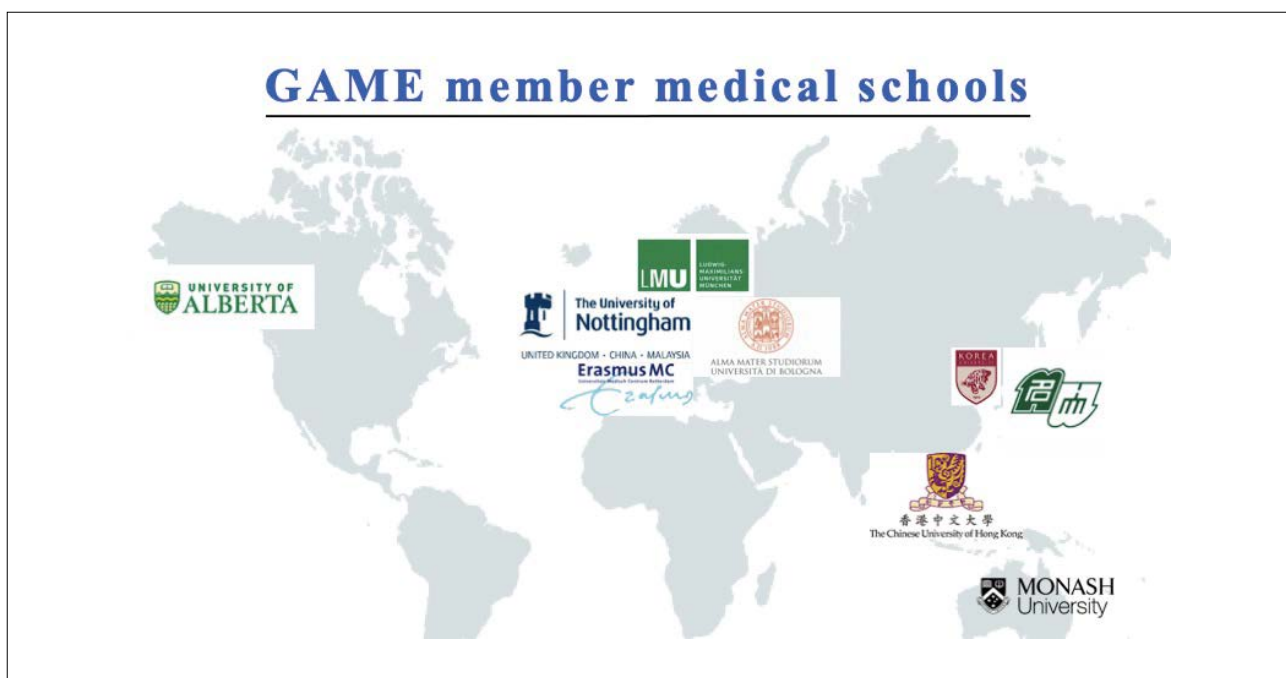
GAME のもう一つの目的である、世界に影響を与える研究への挑戦では、各メンバー校が研究テーマを出し合い、右の表にある9種類の研究テーマが決まりました。各リーダー校

の研究計画の下、メンバー校がデータを持ち寄って医学系国際共同研究として進められ、研究成果は国際共著として出版される予定です。本学からは神経内科の勝野教授から「International Collaboration for At Risk Cohort of Lewy Body Disease(レビー小体病のハイリスクコホート国際共同研究)」という研究テーマが提出されています。まだ、GAME は設立されて間もない共同プログラムで、9月26日から9月27日に、3回目となるアニュアルミーティングが高麗大の主導で開催される予定です。しかし、各メンバー校の熱意はとて高く、本学もその一員として、教育と研究でイノベーションとインパクトを世界に与えることができるように、GAMEを通じた国際共同教育と国際共同研究の可能性を探求していきます。

※ジョイントディグリープログラム

連携する大学間で開設された単一の共同の教育プログラムを学生が修了した際に、当該連携する複数の大学が共同で単一の学位を授与するもの。

Impact Research
Building a Magnetic Resonance Imaging Consortium Leading University: University of Nottingham
Building a Research Network in Preventive Gerontology Leading University: Monash University
Collaboration in Health Data Management Leading University: University of Alberta
Healthy Start Network Leading University: Erasmus MC
International Collaboration for At Risk Cohort of Lewy Body Disease Leading University: Nagoya University
International Microbiota Research Network: Gut Microbiota Across Ethnicities and Populations Leading University: The Chinese University of Hong Kong
International Network of Drug-induced Liver Injury Research Leading University: Ludwig Maximilian University of Munich
International Online Barrett's Esophagus Registry (IOBER) Leading University: University of Bologna
Transnational Educational Initiative (TEI) Leading University: Korea University, Nagoya University





創基150周年

名古屋大学医学部の沿革とこれから

Others

大学院医学系研究科 産婦人科学 吉川 史隆 教授



昭和33年の医学部の写真

仮病院・仮医学校

名古屋藩は明治4年(1871年)5月、洋医学校の設立を求める時代の要請に応じて、元名古屋藩評定所跡に仮病院を設立し、続いて元町役所跡に病院附属の仮医学校を創設しました。これを端緒として名古屋大学医学部は今日まで発展を続け、令和3年(2021年)に創基150周年を迎えます。

明治5年(1872年)2月の廃藩置県により、仮病院は閉院となり、仮医学校も同年8月の文部省学制改革によって廃校となりました。有志により4月からは義病院として再開しましたが、財政困窮により明治6年(1873年)2月に閉院となりました。しかし、当時の県令井関盛良のはたらきにより、明治6年(1873年)5月に西本願寺別院に仮病院を復興開設すると同時に、アメリカ人医師、ドクトル・ヨングハンスを3年の雇用契約で招へいしました。同年11月には仮病院内に医学講習場が設けられ、英語による授業を開始しました。

愛知県病院・公立病院・公立医学所・公立医学校

仮病院の呼称は明治8年(1875年)1月に愛知県病院へ、明治9年(1876年)4月には県病院から公立病院へと代わり、医学講習場も公立医学講習場へ、6月には公立医学所へと呼称が変更されました。ヨングハンスの後任としてオーストリア医学士のアルベルト・フォン・ローレッツが着任し、明治9年(1876年)5月より、講義の言語は英語からドイツ語に変更されました。公立医学所の技術進歩に伴って信望が高まると、堀川河畔の天王崎町の旧千賀氏邸跡の敷地面積5,700坪に病院と学校を新設。明治10年(1877年)7月に開院式を行いました。明治11年(1878年)4月には公立医学所から公立医学校と改称。解剖局、岡崎支病院、伝染病舎などの新設、学科の増講や医事新報の発行など病院、医学校としての機能を充実していきました。ローレッツの功績は非常に大きく、契約を1年延長した後、明治13年(1880年)4月に退任となり、名古屋を離れました。同年5月には後藤新平が校長心得となり、以後の発展に貢献しました。

愛知病院・愛知医学校

明治14年(1881年)9月に公立病院から愛知病院へ、10月には公立医学校から愛知医学校へと改称され、後藤新平は愛知病院長兼愛知医学校校長に任命され、明治16年(1883年)1月まで務めました。明治15年(1882年)5月には日本の医学校の体制が変化し、これにより医学校は甲(通常の医学科を教授する)乙(簡易の医学科を授けて医師の速成を図る)の2種に分類されましたが、愛知医学校は明治16年(1883年)4月に甲種医学校に認定されました。愛知病院では内科、外科、眼科の3科を置いていましたが、明治22年(1889年)11月より婦嬰科を新設して、婦人科及び小児科の患者の診察、治療に当たることになりました。明治26年(1893年)4月、中学卒業者が医学校へ入学できるよう、その前段階として修業年限2年・定員200名の予科を医学校に新設。明治27年(1894年)5月に医学校内に愛知医学会が結成され、同年7月に愛知医学会雑誌第一号を発刊、その後、中央医学会雑誌と改名されました。同7月、医学校内に産婆及び看護婦の養成所を創設。明治33年(1900年)9月に同窓会の設立が決定され、10月に発足式、12月に同窓会雑誌第一号が発行されました。



愛知医学校の写真

愛知県立医学校

明治34年(1901年)8月に愛知県立医学校と改名され、明治36年(1903年)7月には愛知県立医学専門学校に昇格。修業年限は4年で学科目は修身、解剖、組織、生理、病理、薬物、内科、外科、眼科、産科及び婦人科、衛生、法医、物理、化学、ドイツ語、体操でした。明治38年(1905年)7月には病院組織の再編

により新たに耳鼻咽喉科と皮膚花柳科が加わっています。明治43年(1910年)2月、愛知県立医学専門学校に研究科を附設することが決定し、明治44年(1911年)3月に今日の整形外科に相当する外科学第三部が加わりました(大正9年(1920年)3月整形外科と改称)。

大正3年(1914年)3月に現在の鶴舞地区に新校舎および新病院が竣工され、翌年4月より授業及び診療が開始されました。教科目中の物理は明治42年(1909年)10月、医用電気学と改名していましたが、大正5年(1916年)4月には発展解消して理学療法部となり、翌年には歯科部も開設されました。



愛知県立医学専門学校の写真

愛知医科大学・名古屋医科大学

学長および職員、学友会、県市議会、医師会などの政府への陳情により、大正9年(1920年)7月に愛知医科大学へ昇格しました。

大学当局、学友会、県議会、市議会、市教育会、各新聞社などの協力を得て、昭和6年(1931年)5月より官立の名古屋医科大学に昇格。そのため愛知医科大学予科は在校生の卒業をもって昭和8年(1933年)3月に廃止されました。

名古屋帝国大学

政府に対し交渉を重ねた結果、昭和14年(1939年)4月、医学部と理工学部よりなる名古屋帝国大学が誕生します。医学部の講座数は下記の24講座でした。

解剖学:3講座、生理学:2講座、生化学、病理学:2講座、薬理学、細菌学、衛生学、法医学、内科学:3講座、外科学:2講座、整形外科学、産科学・婦人科学、眼科学、精神病学、小児科学、皮膚科学・泌尿器科学、耳鼻咽喉科学

日中戦争の影響による軍医の需要の急増により、昭和14年(1939年)5月に名古屋帝国大学附属医学専門部が急設され、戦後、昭和25年(1950年)に最後の卒業生を送り出しました。また昭和16年(1941年)9月に中区東新町・陸田ビルディングの寄贈を受けて附属医院分室が開院され、昭和19年(1944年)に医学部附属医院分院と改称されました。

名古屋大学

昭和22年(1947年)10月より名古屋帝国大学から名古屋大学へ改称。昭和24年(1949年)5月に国立学校設置法が公布され、いわゆる新制大学となると同時に附属医院は附属病院と改称されました。昭和28年(1953年)4月より医学部以外に大学院が設置され、医学部には2年後の昭和30年(1955年)4月より大学院が置かれました。分院は昭和36年(1961年)9月に東区東門前町に新築移転した後、昭和50年(1975年)7月に現在の大幸地区に移り、昭和52年(1977年)10月には医療技術短期大学部が設置されました。

平成12年(2000年)4月には医学部の大学院重点化が完了し、大学院を中心とした体制に

変更。平成16年(2004年)4月には国立大学から国立大学法人名古屋大学となりました。平成30年(2018年)3月には指定国立大学法人として文部科学省より指定され、本学部も世界最高水準の教育研究活動を進めています。名古屋大学医学部の歴史は150年に及び、その間、大変革と変貌を遂げてきました。直近の四半世紀も改革は著しく、令和元年(2019年)5月現在で、基礎医学領域56分野(協力講座・連携講座を含む)、臨床医学領域53分野(協力講座を含む)、統合医学領域6分野、附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター9分野、寄付講座12分野、産学協同研究講座3分野、その他附属病院やセンターなどから成る大組織となりました。

また、令和3年(2021年)に創基150周年を迎えるにあたり、名古屋大学医学部のブランド力向上とともに、名古屋大学医学部に関わる皆さんの心に残り、アイデンティティとなるキャンパスを目指して整備を計画しています。ほかに、動物実験施設の整備、150年史の編纂及び記念集会も予定しており、150周年を機に、さらに名古屋大学大学院医学系研究科・医学部を発展させていきたいと考えています。



現在の鶴舞キャンパスの写真